岡崎市美術博物館ニュース〈アルカディア〉

92
AUTUMN
2022

ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

眼の極楽 41

花と鳥のかたち

特任館長　榊原悟

いや、そうではあるまい。改めて二匹の蛙を見て欲しい。左右反転するものの両者酷似する。両図の制作年代の先後を考えれば、「隠元豆図」の蛙から「池辺群虫図」の蛙へと、そのかたちが伝えられたのだろう。むろん、若冲の画嚢にあった粉本を通してで、既にそのこと自体粉本制作そのものではないか。しかも、その「隠元豆図」そのものに常州草虫画からの影響があると云う。これを指摘した佐藤氏にとって、そのことは自明だからなのか、その鑑識の根拠を示していないが、隠元豆を天蓋のようにあしらった図様構成一つとっても、それは窺えるだろうし、舶載されて日もない隠元豆や玉蜀黍を、絵に取上げるのが前例に乏しいことを思えば、ここにも何らかの図像情報があったのでは、とみるのが自然だろう。当然、蛙にもそれがあったとするのが順当なところ、と述べると、もう一匹の蛙を思い出してくれる読者もいるはずだ。

言うまでもない。土佐光則の、あの「芙蓉群虫図」（東博本『雑画帖』のうち）に登場した蛙だ（図1）。同図に描かれた二匹の飛蝗が、唐絵草虫画の実際を伝える一点バージニア本『花鳥草虫図押絵貼屏風』のうちの「鼻高栗鼠図」の飛蝗から図像情報を得ているところから、この蛙も、同じバージニア本の別の一図「翡翠に蛙図」からの情報を踏まえたのではないか（図2）、と類推した。むろん、この推定の前提には光則が、自らの眼で蛙を観察、生写し、本画に仕上げるのは時期尚早、との判断があったからである。要するに粉本制作。それ以外に光則が蛙を描くことなどできるはずもない、と。

図1

図2

見逃すべきでないのは、今回の検討で、若冲もまた逆S字形に彎曲する櫟を描くに当たって、同じバージニア本の「栗に猿図」の栗から図像情報を得ていることが判明した点である。となると蛙もまた同様に、と類推したくなるのも無理からぬところだろうが…、やはり図像情報を、バージニア本の蛙のみに限定するのは難しいのではないか。バージニア本の蛙が蓮の上、光則、若冲のそれが池畔、その姿態も、バージニア本が左後脚を後方に伸ばしているのに対し、他のそれがきっちりと脚をそろえているなど、似通わせているようで、その実、大きな違いがあるからである。逆に光則蛙、若冲蛙のかたちが一致していることに注目すべきだろう。それに粉本として用いるのなら、そこに描かれた姿かたちを、ほぼそのまま忠実になぞるのが普通だろう。

とは云え光則が、何らかの図像情報を得ていたのは間違いないとなれば、他の唐絵草虫画にそれを求める以外に手はあるまい。実際光則の『雑画帖』には、蜻蛉尽くし（「朝顔と蜻蛉図」）や蝶尽くし（「秋郊群蝶図」）、さらに虫は登場しないが「菊花撩乱図」など、常州草虫画からの情報がなければ、光則には描けるはずもないし、若冲にしても『動植綵絵』最初期の作とみられる「芍薬群蝶図」（図3）のように、光則の「秋郊群蝶図」（図4）にも近く、やはり常州草虫画との関連を窺わせるものがあるからだ。

図3

図4

図5

しかも、伝存する常州草虫画の中の、例えば京都国立博物館本の右幅には、シラクキナの根元で蜥蜴と睨み合う蛙（図5）が描かれているではないか。姿かたちが光則や若冲の蛙とは異なるため、その図像的淵源とは見做されないものの、常州草虫画には、確かに蛙の描かれていた作があったのだ。

と云うより常州草虫画が常套的に同一モチーフを、くり返し描き続けていることを思えば、他にも蛙の登場する作があったのは間違いない。そこから図像情報を得たのではなかったか。と述べると、

―まったく結論ありきの推測で、虫のいい話はもういい加減にしたら、との批判が出そうだが、しかし、これこそが光則蛙、若冲蛙誕生の実際で、しかも両者には共通の図像的淵源があったのではないか。常州草虫画（唐絵草虫画）が、わたしたちの先祖の花と鳥、虫を見る眼、花鳥画に与えた影響は、まことに大きい。

ただし、誤解を招かないよう、敢えて一言述べて措かねばならないのは、いま池畔に座る蛙を発端に、常州草虫画との係わりを導き出したが、「池辺群虫図」の制作がすべて常州草虫画に負っているわけではない点だ。

例えば当のその蛙である。問題としたのは池畔、左方の蛙で、これはヒキガエルと同定されているが、図中には、実はこれとは別種のダルマガエルも描かれている。池畔、右方の蛙と、池中の蛙がそれで、そのうち平泳ぎ？ならぬ蛙泳ぎする一匹は、同じく『玄圃瑤華』にも登場するのだが（図6）、残念ながら、これらの蛙の図像的典拠については、そもそもその有無さえ含めて不明。わたしは、このダルマガエルこそは、ヒキガエルの描写に触発されて、若冲が自らの眼を通して生写したものではないかと思う。この蛙が関西以西に多く棲息するからであるが、いずれにせよ、一図で二種のカエルを描き分け、さらに『動植綵絵』や『玄圃瑤華』で取上げた草花に至っては、その多種多様さにおいて、従来のそれを一新するなど、動植物に向ける若冲の視線には、従来のそれとは異なる傾向がある、と認めざるを得ない。博物学的関心に裏打ちされた眼である。若冲の眼にも、それがあった。

となると、わたしたちは、既に虫たちに導かれて、江戸の花園（花鳥画の世界）に入り込んでしまったのか。しかし、その花園については改めて述べるとし、ここでは常州草虫画からの影響を指摘するだけに留めたい。

だが、そうした事実を踏まえればこそ、周知の作品にも新たな顔が見えてくるはずだ。そこで取上げたいのは、ここでもまた「池辺群虫図」（図7）。見て欲しいのは、蛙ではない。瓢箪の、実でもない。その葉である。根元を描かず、一見、葉のみを画面全体に散らしたように見える。しかし、わずかに覗く蔓に沿って一枚一枚葉を追ってみると、それらが画面左下を起点に、反時計回りに配されていることが分かるだろう。その配置が周倒に計算されたものであることは、それら蔓や葉で形成される大きな楕円線が、画面下方で交叉する土坡の弧線などに、きっちり即応・対応していることから明らかだ。

図6

図7

図8

ではその意図は。それを知るには「隠元豆図」（図8）を見るに如くはない。「池辺群虫図」の蛙の原図となった蛙が登場する一図だが、注目したいのはそこに描かれた隠元豆である。若冲が「池辺群虫図」を描くに際して、「隠元豆図」から継承したのは、どうやら蛙だけではなかったようだ。画面左下から、同じく反時計回りで大きく弧を描きながら、隠元豆が左上方へと伸長する。そのかたちの原形が常州草虫画の天蓋植物に由来することを指摘したはずだが、先端を画面外ではなく、下方向に伸ばせば、まさに「池辺群虫図」の瓢箪になるではないか。その瓢箪によって画面を限る。いや、限るだけでない。さらに渦のように内向きの閉じた空間を創る。限定化と閉塞感の醸成、反時計回りの瓢箪は、そのためであったのだ（画面外、左上方へ伸びた隠元豆が形成した開放的空間と較べたい）。その閉じた空間に淡墨、淡藍で刷毛目を水平に重ねれば、たちどころにそこは池面となる。そこに蛙やオタマジャクシ、アカハライモリを描く。さらに瓢箪の実や葉に守宮や毛虫、甲虫、蝉、蟷螂、蜻蛉などを留まらせ、蝶や蜂を飛ばす。それらが閉じられた画面に散らされているため、密集感はいやが上にも増す。若冲のまさしく独創的世界である。そのすべてを演出したのが瓢箪であると気が付けば、若冲の意図も自ずから明らかであるに違いない。

忘れてはならないのは、その「池辺群虫図」を描くに当たって「隠元豆図」の制作が前提にあったことと、さらにその向こうに常州草虫画学習の記憶があったことだ。その意味で「池辺群虫図」の世界をまさしく骨格の部分で支えたもの、それが常州草虫画であった。

図1　蛙「芙蓉群虫図」（『雑画帖』）より
図2　蛙「翡翠に蛙図（バージニア本左隻第二扇）より
図3「芍薬群蝶図」『動植綵絵』のうち
図4「秋郊群蝶図」『雑画帖』のうち
図5　蛙　京博本『草虫図』右幅より
図6　ダルマガエル『玄圃瑤華』より
図7「池辺群虫図」『動植綵絵』のうち
図8「隠元豆図」『隠元豆・玉蜀黍図』右幅

第一期　改修工事について

休館期間：令和４年８月29日―令和５年３月31日（予定）

金沢　実徳

第一期改修工事では目に見えない部分のメンテナンスが中心。
・機械設備改修（空調設備本体の更新など）
・電気設備改修（展示室照明のＬＥＤ化など）
・建築改修（展示ケースの修繕や低反射フィルムをケース表面に貼付）
・来館者用と搬入用エレベーターの更新

当館は改修工事のため、八月末から休館に入りました。ここでは、工事休館直前の館の様子をお知らせしたいと思います。

原稿を執筆している今日（八月二十三日）、二十四節季の「処暑」を迎えました。まだまだ残暑が続いていますが、それでも夏の厳しい暑さの峠を越し、朝夕には涼しい風が吹いて、着実に季節の移りかわりを感じられます。

そんな時分、当館では、今年度最後となる展覧会「ルネ・ラリック展」の閉幕が近づき、とうとう工事休館に入ろうとしています。

これまで、工事へ向けたあらゆる準備を職員総出で取り組んできました。展覧会の準備や撤去の予定を立てるにも、今年は工事を念頭に、関係者の出入りの日程や作業スペース、導線の確保など、様々な配慮と調整をして進めるといった感じです。

休館直前のこの夏は特に、改修工事の担当職員はじめ館長、副館長、管理係長は、館に出入りする改修工事に携わる建築課や担当業者の方と工事開始へ向けた打ち合わせや現場の確認に館内をせわしなく動きまわっています。

■工事の担当職員に進捗や意気込み、心配事を訊いてみた―

・市民の皆様の大切な宝物をお預かりしているため、慎重に、着実に進めていきます。ふんす！（館長）

・粛々と進めてまいります。（管理係長）

・まだまだ準備段階。今は、機械設備の詳細の調査を担当業者さんが進めているところです。これまでに状況がバタバタ変わったから心配なこともあるけれど、無事に工事が終えられるようにしたいですね。（管理係業務員副主任）

・安全に無事に終わるといいですね。（管理係技師）

・収蔵資料の安全を第一に慎重に作業を進めてまいります。（学芸係博物担当）

・館内業務と工事スケジュールの調整、怒号が飛び交うことなく穏やかに進めていきたいです。（学芸係美術担当）

一方、学芸員はというと、今回の工事には欠かせないバックヤードの整理で大忙しです。展示ケース、展示台、展示資材の選別作業と同時に、それらを工事スペースや導線確保のため、支障のない場所へと大移動させました。現在バックヤードは工事仕様にスッキリとしています。また、収蔵品の整理や点検、養生作業なども同時に行っています。

そして、令和五年度の開館へ向けた展覧会の準備を、担当学芸員が進めています。展覧会の内容についてはまだお知らせできませんが、楽しみにしていてくださいね！

休館中の館活動では「やさしいミュージアム講座」の開講、ホームページやＳＮＳで館情報の発信を行う予定です。

今号が発行したほんの少し先の未来では、季節はまた進み、当館はまさに工事現場と化していることでしょう。次号では、その進捗をお知らせする予定です。さて、新しい年を迎え、工事の峠は越しているのでしょうか。

暮らしの道具箱 Ⅳ
ダイヤル回して電話する

伊藤　久美子

平成の時代になって携帯電話が広く一般に使われるようになり、令和の今、電話機はスマートフォンが中心となっています。

日本では明治二三年（一八九〇）に、東京―横浜間で電話がかけられるようになりましたが、一家に一台といわれるくらい電話が普及してくるのは、昭和三〇年代後半から四〇年代にかけてのことです。

かつてどの家庭でもみられた有名な「黒電話」は、六〇〇形自動式卓上電話機と呼ばれるもので、昭和三七年（一九六二）に登場します【写真1】。ダイヤル式電話機の最盛期を支えた六〇〇形は、当時の最高技術を集めた「完成された電話機」と言われ、通信性能が格段に向上したばかりでなく耐久性にも優れていました。おそらく、現在でも、ダイヤル式の電話をお使いの家庭もあるのではないでしょうか。

写真1

家庭用電話機は初め黒色だけで選択肢がありませんでしたが、【写真2】アイボリーのように、カラフルな色のものが次第に登場するようになります。

ところで、あなたはダイヤル式の電話をかけられますか。

受話器をもちあげて、相手の電話番号をジーコジーコとダイヤル回して（ダイヤルして）電話する。

何を当たり前のことを、と言われるかも。ですが、子供たちばかりでなく大人の三〇歳以下の世代は、ほとんど日常的に使ったことがありませんから、先ずは「受話器をもちあげて」から説明を始めなければなりません。「ダイヤルする」「ダイヤルを回す」は通じませんよ。数字の丸い穴に指を入れてダイヤルを回すことに感動！　でも、番号を回した後、ダイヤルが戻ってくるのが、とくにゼロを回した後のダイヤルが戻る時間が長くてじれったい、待っていられない。体験してもらうと、この電話かけるのめんどくさ～い、ってなるんです。これ、ホントのお話。ちなみに押しボタン式電話機「プッシュホン」が発売されたのは昭和四四年のことで、当初は東京・大阪・名古屋に登場しました。操作が簡単でスピーディーに行うことができ、通話だけでなく様々な新しい電話サービスが利用できるようになりました。

写真2

一般家庭にまだ電話がなかった頃、急ぎの用事には電話よりも電報を使うことが主だった時代には、電話は村に一軒とか、店や会社や郵便局などに設置されている程度でした。そのため、電話のない家では「呼出（よびだし）電話」の利用が当たり前にありました。電話をもっている近所の家などにかけてもらい、電話を受けた家の人が呼び出された人の家まで呼びに行く方法です。そのため、電話がある家では電話機を玄関または廊下に置くのが一般的な光景だったのです。

そして、電話機の横には料金箱が置かれていることがありました。【写真3】は高さ一八.五・幅八.五cmの木箱で、正面にしっかりと「電話料金箱」と書かれています。電話を使わせてもらった人が料金を入れるのです。側面に鍵付きの取出し口があり、お金はそこから取り出せるようになっています。このような箱がない場合でも、電話機の横に料金を置いていくのがマナーでした。戦後に需要が多くなった公衆電話の通話料金（市内）が昭和二八年で一通話十円、四四年に一通話三分という上限が定められて十円でしたから、最低十円を、遠方にかけた場合には相応の料金を置いていったものでした。現在は、一分で十円（税込）になっています。

写真3

携帯電話の急速な広まりとともに電話は一人一台の時代ともなり、家の電話であった固定電話をもたない家庭も増えています。今やダイヤル式の電話は、レトロな昭和のシンボル的存在といったところでしょうか。でも、いつまでも人気のある道具のひとつです。

連載

本多家の家臣団　1

〈本多忠勝の家臣団〉

湯谷　翔悟

今川氏真判物（岡崎市美術博物館蔵）

今回から誌面をお借りして、本多忠勝からはじまる本多家（中務大輔家・後本多家）の家臣団について文章を書かせてもらえることとなった。不定期ではあるが、資料の紹介も兼ねて続けられる限り連載していきたい。

一．本多忠勝の家臣団

忠勝の家臣に関する資料は少ない。こと古文書などの同時代資料に限ると、ほぼ皆無である（のち筆頭家老となる都筑家に、数点あるのみ）。必然的に用いる資料は、後世、主に江戸時代の記録や系図に頼ることになる。

しかしこの記録・系図が厄介なのである。どうも本多家家臣団においては、江戸時代前期には既に、来歴が分からなくなった家が多いようだ。結果として、資料間で記述が異なるという現象が多々生じている。

さらに、（心情として致し方ないことであるが）自家を少しでも良く見せようとして、潤色した記述もみられる。特に本多家の家臣には、徳川家康の元直臣という由緒を主張する家が多数存在している。家康の元直臣である（と主張する）ことは、己の家が他の家臣とは別格の由緒をもつことを示すことにつながる。そして実際に、その由緒が、特別な恩恵をもたらした事例も存在する。

このように、本多家の家臣団を調べるには、まず資料の記述が本当に正しいのか？を吟味する必要が出てくる。

その最たるものが、一九世紀に全国の大名・旗本などの由緒をまとめた『寛政重修諸家譜』（以降、『寛政譜』と略記）の記述である。この『寛政譜』に記載された本多忠勝の来歴の中で、永禄九年（一五六六）に家康から五〇余騎が附けられたとある。忠勝について書かれた書籍などには必ず引用される内容であるが、個別に見ていくと、永禄九年に附属されたのでは他の資料と整合が取れない家が存在する。

その一つが、本多家筆頭家老となる都筑家である。都筑家は遠江国（現静岡県西部）の有力武将の一つで、もとは今川家に仕えていた。永禄九年は家康が三河統一を果たし、いざ遠州攻略へ、という時期である。『寛政譜』に従うと、都筑は家康の遠州進攻直後に忠勝に附属されたことになる。しかし実際には、永禄九年一〇月一日に、今川氏真が都筑惣左衛門秀綱に発給した判物が現存しており（写真参照）、この時はまだ今川方として活動していたことが知られる。

では、都筑秀綱はいつ忠勝に附属されたのか。それを明確に示す資料は現存しないが、永禄一二年に家康から都筑秀綱に発給した安堵状も残されていることから、それ以降のことと考えられる。そして実は、『寛政譜』の都筑秀綱の来歴には、永禄一二年と書かれている。同じ『寛政譜』の中で、記述が異なっているのである。相違が生じた原因は不明であるが、本多家の家譜が出されたあとに、都筑家の家譜の提出が求められていることも関係している可能性がある。

どうやら都筑家は、永禄九年の附属ではなさそうだ。そして同様の家は他にもある。

〈続〉

現代の超現実を探してI
〈拘束しているもの、拘束を解いてゆくこと〉

今泉　岳大

井口直人《untitled》2015-2022年

これは作者の井口直人（一九七一―）がコピー機に自分の顔を押し付けて印刷したものである。井口は約二〇年間、自身のライフワークとして彼が日常的に収集したものと自分の顔を同時に映し込んだコピーを行っている。これが彼の記録ということだけに留まらず、美術作品であるという性格を色濃くしている所以は、配色[i]や構図をバリエーション豊かにしている点、コピー機の読み取りに合わせて顔やものを動かして仕上がりを工夫している点にある。井口はその後、印刷したコピー用紙の一部を素材にして腕章を制作し、場合によって周りの人に贈呈するが、一連の行為について自ら説明しないため、コピーは腕章のための素材なのか、二次的な創作なのか、あるいはそれらを含めたコミュニケーションの道具なのか、その真意はわからない。

オフィスコピー機は複写機能を持つ印刷装置であるが、表現手法として再考すると、その機能は写真的であり版画的であるといえる。美術史において、写真や版画は表現に多用されてきたが、コピー機はそうではなかった。一九六〇―七〇年にブルーノ・ムナーリ（一九〇七―一九九八）や高松次郎（一九三六―一九九八）など一部の芸術家によって使われたが、それ以降目立った活動はなかったと言っていいだろう。ムナーリはコピー機で読み取る対象を動かすなど遊び心に富んだ手法で、再現不可能な《オリジナルのゼログラフィーア》という作品を制作した。高松は一九七〇年に「ゼロックスで一〇〇枚コピーされたうちのこの一枚」という文字が書かれた紙一〇〇枚にエディションを付けた作品《この原稿をゼロックスすること》を制作するなど、作品の唯一性について考察するための装置としてコピー機を利用した。コピー機を用いた作品の制作は、現代では「複製」や「コラージュ」の可能性を探る「THE COPY TRAVELERS」[ii]というアーティスト・ユニットの活動など、新たな表現が模索されはじめている。

井口はコピー機の「スタート」ボタンを押して、素早く読み取り面に顔を押し付ける。機械に自らの身体を変形させて、不自由な体勢で印刷を行う井口の姿は、マシュー・バーニー（一九六七―）が一九八七年からはじめた《拘束のドローイング》シリーズ[iii]を想起させる。コピーに映し出された井口の顔は―顔を押し付けているから当然であるが―鼻など部分的に潰れて苦しそうである。それにも関わらず、井口をコピー制作に突き動かし、顔面コピーに「拘束」させているものは何だろう。それは人間の本質的な表現の欲求であろうか、また他者や社会との関わりを求めてか、あるいは自閉症という特性からであろうか。いずれにせよ、井口の表現は出力された顔面コピーだけではなく、日常に編み込まれた一連の行為それ自体であると捉えるべきだろう。

私たちがコンビニに入って、真剣な面持ちで気忙しく自分の顔をコピーしている中年男性がいたら、その非日常的な光景に驚くかもしれない。しかし、一見奇妙に見えるこの行為は、彼が約二〇年絶え間なく続けてきたもので、彼とその周囲の人々にとっては日常である。井口の表現は、周りの人々が社会通念として持っている「顔をコピー機に押し付けてコピーすることは非常識である」という考え方、その概念としての「拘束」を解くものであった。井口はおそらく今日もどこかで顔をコピーしているのだろう。日々増殖し続けている彼のコピーは、生活の中で無意識にわたしたちを「拘束」している固定観念への問いかけのようである。

＊井口直人作品は今後開催する企画展で紹介する予定です。お楽しみに。

i 井口が二色カラーにするのは、フルカラーが五〇円に対して二色カラーは二〇円という安さがきっかけだったという。

ii 二〇一四年に結成し、京都を拠点に活動する加納俊輔、迫鉄平、上田良の三名からなるアーティスト・ユニット。

iii《拘束のドローイング一―六》ではバーニーが自らの身体に様々な負担を掛けた状態でドローイングを行った。

SHOP INFORMATION

MUSEUM SHOP
YAGURA
岡崎市美術博物館

熊本県を代表する伝統的な郷土玩具「木の葉猿」。
熊本県玉名市玉東町の木葉山山麓で作られている、猿の形をした素焼きの土人形。歴史は非常に古く、養老７年（723年）の元旦に、都の落人が夢枕に立った老翁のお告げにより奈良の春日大明神を祀り木葉山の赤土で祭器を作り、残った土を捨てたところ、それが猿に化け飛び去っていきました。落人たちが不思議がっていると3mの背丈の赤い顔の巨人が現れ「木葉の土でましろ（猿）を作れば幸せになれるだろう」と言い残して姿を消したため、落人たちは神のお告げと思い赤土で祭器と共に猿を作り神に供えたところ、天変地異の災害にあっても無事平安に過ごすことができたという言い伝えが残っています。
以来悪病・厄除け・子孫繁栄などの縁起物として親しまれています。
木の葉猿は、素焼きの荒いタッチの素朴さと、とぼけた味わいが特徴です。型を使わず指先だけで粘土を捻る「手びねり」でひとつひとつ丁寧に作られています。
MUSEUMSHOP　YAGURA は休館中のため、安城市にある姉妹店インテリアショップ soup. にてお買い求めいただけます。
休館中のお問い合わせは soup.(0566-95-5288) までお気軽にお問合せください。

営業時間　休館中のためCLOSED
H　P　https://www.b-soup.com

YOUR TABLE

岡崎市美術博物館併設のカフェレストラン『YOUR TABLE』。ガラス張りの店内には太陽の光がいっぱい入り、お洒落で開放的な空間が広がります。ランチ時には景色を愉しみながらお食事をすることができます。
カフェタイムにはやケーキセットや軽食などを販売中。

営業時間　11:00～21:00
定 休 日　月曜日（祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります）
LUNCH　11:00 - 14:30 (L.O.14:00)
T E A　14:30 - 17:00 (L.O.16:00)
DINNER　18:00 - 21:30 (L.O.20:30)　※平日木曜日のみディナーはお休みです
T E L　0564-28-0141
H　P　https://your-table.owst.jp

LETTER

「多様な幸せのかたち」

二〇一九年にグレタ・ガーウィグ監督の「ストーリー・オブ・マイライフ／わたしたちの若草物語」は、タイトルからもわかるようにルイーザ・メイ・オルコットの名作小説「若草物語」を原作とした映画である。映画館で鑑賞する機会を逸してしまい残念に思っていたが、某動画配信サービスで見つけたので早速自宅で鑑賞することに。本作は原作ファンが感じがちな「物足りなさ」をあまり感じることなく観賞できる内容で、本作は原作ファンの私の心はがっちりと掴まれた。

映画の舞台は一九世紀アメリカ。南北戦争時代に生きる優しく善良なマーチ家の四姉妹メグ、ジョー、ベス、エイミーの物語だ。堅実で控え目な長女メグ、信念が強く情熱家で、活発な次女ジョー、心優しく病弱な三女ベス、奔放でオシャレが大好きな四女エイミー。個性豊かな姉妹の中でも、主人公の次女ジョーは小説家としての成功を夢見て、日々執筆に励んでいた。女性が冷遇された時代に、表現者として成功するのは並大抵のことではなかった。本作は、女性が表現者として生きる難しさを描き、社会に生きる女性の幸せとは何かという問いを投げかける作品である。そして四姉妹の人生を通じて多様な幸せの在り方を提示している。社会が押し付ける「普通」に屈することなく、自分の価値観を貫く女性として描かれるジョーの姿に、勇気をもらう人は少なくないだろう。生きづらさを感じている人や、目標に向かっている人に是非見ていただきたい作品。

表紙画像：国島征二《Wrapped Memory》1999年（当館蔵）
＊国島氏は今年３月７日に亡くなりました。同氏は彫刻家として国内外で活躍し、市東部山あいの額田地区に居を構え制作活動を行いました。

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館

設備改修工事のため、岡崎市美術博物館は
令和5年3月31日（予定）まで休館します

H　P　https://www.city.okazaki.lg.jp/museum

ARCADIA
OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

［岡崎市美術博物館ニュース／アルカディア］　第92号 2022年10月発行
編集・発行　岡崎市美術博物館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1番地　岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000（代表）